

絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践 ～絵本『ねずみくんのチョッキ』の世界を楽しむ～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年

井村 友依・牛島 楓香・江崎 千尋

古賀 まい・近藤 優那・境 琴音・清水 秋

世戸 絢楓・田中 葵・水落 未悠

題材とした絵本：ねずみくんのチョッキ

文：なかえ よしを 絵：上野 紀子 出版：ポプラ社（第81刷）

タイトル：「ねずみくんとぎゅうにゅうぱっく」

実践準備の担当：代表 [スケジュール] (井村友依・江崎千尋)

会計 (牛島 楓香) 脚本 (清水 秋・水落 未悠)

衣装・小道具 (古賀 まい・近藤 優那・世戸 絢楓)

曲・ピアノ (境 琴音・田中葵)

実践時の担当：ねずみくん (江崎 千尋)、ネコ (古賀 まい)、ウサギ (清水 秋)、

ウシ (井村 友依)、ナレーション (水落 未悠)、

音・ピアノ (境 琴音)、音響 (近藤 優那)、

カメラ (牛島 楓香・世戸 絢楓) 切り替え (田中 葵)

1. 題材「ねずみくんのチョッキ」選定の理由

「ねずみくんのチョッキ」は、主人公のねずみくんがお母さんに編んでもらったチョッキを、姿も大きさも違う個性的な動物たちに「着せてよ」と頼まれて貸していくストーリーである。貸していくうちに、どんどんチョッキが伸びてしまい、チョッキは着れなくなってしまいが、それをブランコに変身させ、最後は楽しく遊ぶねずみくんの姿がある。

この絵本の特徴は、チョッキを通してたくさんの動物たちと交流し、思いやりを感じることができたり、使えなくなったものでも見方を変えると、また別の楽しいものに生まれ変わることができるということが描かれている所だと思う。

3歳児になると、少しずつ友達との交流が増え始め、自分で色んなことを考えてやってみたりなど、社会性や自我の発達が見られる。「ねずみくんのチョッキ」の絵本では、他の動物たちとの関わりや、想像力の広がる内容が適していると思い、この絵本を選んだ。

(執筆者：田中 葵)

2. 絵本の世界から遊びへの展開

ねずみくんのチョッキから色んな動物がねずみくんのチョッキを着てどんどん伸ばしてしまったが最終的にはブランコになって遊んでいたところから身近にある牛乳パックやペットボトルなどを何か違うものに変えて遊べないかなと子どもたちに問いかけてみて制作をし遊びへ展開した。牛乳パックを受け取るところは普通に道に落ちていたらおかしいので牛さんの「元気キャンペーン」などとしてオリジナルの場面を作った。

本番では牛乳パックで何が作れるか問いかけたところ「乗り物と家」という意見が子どもたちから出たのでどこに紙を貼ったらいいか問いかけながら子どもと制作をして遊んだ。牛乳パックで遊んだことから身近なものに関心が持て、身近なものでたくさん遊べて本来とは違う形で遊べると言うことが伝わったら良いと思った。

(執筆者：世戸 絢楓)

3.実践に際して大切にしたこと

子どもに体験、楽しんで欲しいと考えたことは2つある。それはいつもだったら捨ててしまうものから遊びに繋げていくことの楽しさ、自分の思いを伝えること表現することを体験して欲しいと考えた。

いつも捨ててしまうものから遊びに繋げる楽しさについては、最初に「ねずみくんのチョッキ」を読んだ。その中で本当の役目を果たせなくなったチョッキが新しく生まれ変わりブランコになるという非現実的なことだが、使えなくなったものが新しい遊びになったということを感じて貰えればと思った。この非現実的な遊びの流れを劇を混ぜながらどうしたら遊びに繋がっていくかを子どもに話しかけながら進めていき、現実的なものにしていった。また、こども劇場の最後に他のものを言ってそれでも遊びたいねということで子どもの中にも何か遊んでみたいものが頭に浮かんだ子どももいると思う。

自分の思いを伝えること表現することの体験についてはものづくりの時に感じて欲しいと



考えた。色んな形に切った色画用紙を使い、どうしたら作りたいものを作れるか学生がするのはなく子どもに聞きながら行った。その中でリモートということもあり、伝えたいことが伝わらないというもどかしさを感じた子がいると思う。また、言葉だけでなく、体全体で「こっちこっち」「違うよ」と表現している姿が見られました。伝えるのは大変だが伝わった時の嬉しさを感じられたと思う。

(執筆者：清水秋)

4.内容について

(1) 全体の構成

「ネズミくんのチョッキ」の動物が沢山出てくるところや伸びたチョッキを最後はブランコとして使って遊んでいるところに繋げた作品を作った。

①絵本読み

絵本の読み聞かせから始まることで子どもの集中力を高め、より劇の世界感に入り込めるようにした。

②ブランコ

絵本の最後のページ（ねずみくんがチョッキのブランコで遊んでいる）の場面を再現し、絵本の続きの世界を作った。ここでブランコを通じて子どもと会話をしオンラインの繋がりを実感出来る場を設けた。

③牛乳屋さん

絵本の中で動物が沢山出てくるところに繋げて、ねこ、うさぎ、うしの登場人物を作った。まず牛乳屋さんで元気キャンペーンをしている設定にすることで子どもと一緒に身体運動が出来る場をつくった。牛乳屋さんで牛乳を貰うことで飲み干した牛乳パックができ、絵本の中での伸びたチョッキと繋げた。

④作品作り

ねずみくんがチョッキをブランコにした事を思い出し、牛乳パックも同じように何か違うものに出来ないかを次は子どもと一緒に考える場面にした。子どもからの案を聞き事前に準備していた色んな形の色紙を使って違うものを作るような場にした。また、作るだけで終わらず見立て遊びに繋げることで子どもの充実感を満たせたかと思う。

⑤ブランコの場所に戻る

初めの場所に戻ることで物語をひとつにまとめられるようにした。そこでは、まだ遊びたいという気持ちと明日は違うキャンペーンがあるという次の展開を見せることで終わりという気持ちではなく次が楽しみな気持ちで締めくくれるようにした。

（執筆者：水落 未悠）

(2) 子どもたちとの対話について

幼教子ども劇場で子どもたちに楽しんでもらうためにも、子どもたちが発言できたり動いたり、子どもたちの出来ることを増やすことが大切だと考えた。そのため「ねずみくんと牛乳パック」では子どもたちへの問いかけを多く取り入れ、子どもの意見を尊重し劇を進めていった。

私たちが「どうしたらいいかな」と子どもたちに助けを求めることで、子どもたちは「自分が助けてあげたい、自分の出番が来たんだ」と意見を出し自己主張をすることができる環境を作れたのではないかと思う。

牛乳パックで物を製作する時、「何が作れるか」「牛乳パックに貼り付ける画用紙の形や色」をどのようにしたいか子どもたちに問いかけた時、想像以上に子どもたちの意見が割れ、対話よりも進行を優先してしまった部分もあります。子どもは一人一人違う想像力があると思うので、お題を1つにし何パターンか違う模様の物を作っても良かったかもしれないと思った。

「元気なポーズ」を子どもたちに教えてもらう時も子どもにとって元気なポーズの想像がつかなかったのか、反応が薄く、ポーズをしてくれるまでに時間がかかっていたので、もう少しわかりやすい言葉を選んだ方が良かったのかなとも思った。

どの画用紙を貼るのか子どもたちに尋ね、返ってきた答えと違うものを指し「これかな」とあえて間違えることで子どもたちが一生懸命「違う～色だよ」と大きな声で伝えてくれた様子が見られそれが子どもの自己主張へと繋がりが良かったと思う。

（執筆者：江崎 千尋）

(3) 表現の工夫

幼教こども劇場で、「ねずみくんのチョコキ」は場面の切り替わりが多かったと思った。特に最初の絵本読みからのねずみくんの登場の場面は難しく、またカンペ出しも同時に行ったので大変だった。一人一人が動物の役になりきって演じていたので子どもたちも楽しんでいたのがよかった。道具の準備も細かい所までこだわり、空き時間や空きコマの時間を使ってみんなで協力して道具を作ることができたので演出でも「ねずみくんのチョコキ」をリアルに再現することができた。ネズミくんの最初のシーンでネズミくんがゾウの鼻にあるブランコに乗っているところは、どうやったらゾウの鼻に見えるのか本番のギリギリまで考えて、丸めた画用紙の中に新聞紙を入れたりして太く見せれるのか、こだわってこだわってリアルなゾウの鼻を作ることができた。もうひとつは、ペットボトルを使った背景で、場面が切り替わった時に画面が変わった感じがしなかったのでペットボトルを使ってペンギンや豚やロケット、車などを作った。ペットボトルを置く背景などもこだわっていい作品が作れた。一人一人が道具の作成に熱心になっていたのも、とても演出としても良かった。セリフも動物ごとに合ったセリフで動物によって声を変えたり、動きもより動物に合った動きを工夫していたので子どもたちも見てて楽しそうにしていたのも良かった。子どもたちにかかる声かけも子どもに寄り添っていたのでカメラ側として見ていたけどとてもいいなと思う。そして子どもたちの反応も最初は緊張してて伝わりにくかったけど徐々に子どもたちの反応も良くなってよかった。

(執筆：牛島 楓香)

(4) 音と音楽

ねずみくんがブランコの前で話をしている場面では、猫とうさぎに呼ばれて画面が切り替わるシーンで、展開を分かりやすくするために牛乳屋さんの音楽を入れた。音を入れたことで"これから何かが起こる"という

のが子どもにも伝わりやすかったように思う。明るい曲調で耳に残りやすいリズムを意識して作った。

ねずみくんたちが遊び終わったタイミングでは、夕方に鳴るチャイムのような役割で音を入れ、終わるきっかけを作った。チャイムを再現するためにピアノではなくグロッケンを使用した。

全体を通して、音や音楽が少なかったように思うためセリフの合間に短い音を入れたり作業をしている裏で小さくBGMとして音楽を入れるなど工夫することでもっと子どもたちも楽しめたように思う。

牛乳屋さん

チャイム

A F G C C G A F

(執筆：境 琴音)

(5) プレ幼教こども劇場における子どもの姿と省察

牛乳パックで何を作ることができるのか子どもに聞き、用意していた画用紙のパーツを一緒に選んで貼っていった。子どもに何のパーツを貼るのか聞くときに、固定カメラに自分達が動いて見せていたが、自分達も一つずつ移動して見せるのは大変だったし、子どもたちも製作の様子が見えていなかった。一緒に製作しているように思ってもらうには手元も見えた方がいいと思った。

セリフを話す時や、子ども達に問いかける時に子ども達は聞き取れていないことが度々あった。大きな声でゆっくり話すことを意識することが大切だとわかった。

元気に見えるポーズを子どもにやってもらい、それを真似するときに「このポーズ元気に見える？」と聞いたが、声で返事してくれる子や手で丸を作ってくれる子がいたので、元気に見える時は分かりやすいように手で丸を作ってもらおうといいなと思った。

子ども達は最初から自分達の問いかけや体を動かすときに、積極的に答えたり、動いてくれたりして、楽しい様子を見ることが出来たので良かったと思う。

(執筆者：古賀 まい)

(6) 取り組む過程での改善と工夫

プレ幼教こども劇場の時には今回私たちが題材とした絵本「ねずみくんのチョコッキ」を園の保育者にお話が始まる前に子どもたちに読んでもらうようお願いしていた。しかし園で読んでもらうのではなくこちら側が読むことで子どもたちもお話の世界に自然に入り込むことができると感じた為こちら側で絵本を読むことにした。本番ではチョコッキが似合うかなの場面で子どもたちから「似合わないよ」「えー」という反応がかえってきたりしたので子どもたちの反応を見たり子どもたちと対話できたりしたので良かったと感じた。また、絵本を読む際には一人が全て読むのではなく数人で読むことで声のトーンや速度を変えて一人一人動物になりきることができ子どもたちにも伝わりやすくすることを意識してできた。

プレ幼教こども劇場の時にはカメラが切り替わる場面が多い為、場面が変わったことが伝わりやすく背景が寂しいと感じた。何とかしたいと考えた結果ペットボトルを使い動物や口ケットなど様々な物を作り大きなダンボールに白い画用紙を貼ってその上にペットボトルで作った物を飾ってとても可愛い背景を作った。ダンボールも大きさが違ったり立たなかったりしたので台を下に置いたり小さいダンボールを組み立て上に積み重ねて倒れないよう工夫した。背景を作ったことで画面がカラフルになり子どもたちにも場面が変わったことを伝えられたと思った。

劇の中で子どもたちに「このポーズ元気に見える？」と聞いた時に声で言っていてこちらがあまり聞き取れなかったり分からなかったので本番では子どもたちに元気に見えるなら〇見えないなら×を体で表現してもらおうように変更した。そうすることでパッと目で見て分かるので変更して正解だと思った。

劇の中で音楽を入れたいということになり音楽を入れることにした。今回は牛乳屋さんの場面や帰りの場面をピアノ、グロッケンを使い表現した。音楽を入れたことによって分かりやすく場面が子どもたちに伝わっていた。

(執筆者：近藤 優那)

(7) 幼教こども劇場での子どもたちの様子と省察

【子どもたちの様子】

○子どもたちの様子は、最初保育室に入ってきてこれからどんなことが起こるのかなと不思議に思っていたり、いつもと違う雰囲気緊張していた様子だった。動きもなくピシッと座って保育者の話を聞いていた。

○手遊びの場面では、子どもたちは戸惑っていて、何人かが手遊びを始めたら周りの友達の様子を伺いながら少しずつ慣れていった。

○絵本の場面では、絵本の中にネズミくんのチョッキをいろいろな動物が「似合うかな？」とピチピチのチョッキを着て問いかけている場面がある。その姿をみて「似合わないよ～」 「似合う？」などと言って笑いながら楽しんでいる様子だった。

○劇が始まりネズミくんとブランコの話をして園と劇の中が繋がっていて会話ができていくことがわかり発言する子どもが増えてきた。しかし、発言するのは決まった子どもだけで他の子どもは見ているだけだった。

牛乳屋さんに元気なポーズをみせるシーンでは、子ども達全員が立つよう声をかけ体を使って色々な自分の元気だと思うポーズを表現し、動きのある活動ができた。みんなのポーズの中から選んで牛乳屋さんにポーズを見せるシーンで、子どもにこのポーズでいいかマルカバツかを聞き自分の意思を表していた。

○牛乳パックで製作のシーンでは、牛乳パックで何を想像してつくるか子どもに質問するとみんながそれぞれ思いつくものを発言していた。「お家」と「電車」という意見が出ていたがどちらも意見を譲らず「お家！」「電車だよ！」と言い合っている。最終的に意見がまとまらなかったため両方制作することになった。

○最後の制作が終わり制作で作ったものでネズミくんとうさぎさんと猫さんが遊ぶシーンでは、子どもはその様子を見ているだけだった。

【省察】

- 子どもは元気ポーズをしている場面がそれぞれ自分の思うような個性のある動きをしていてイキイキしている様子でいいと思ったので、もっと子どもたちが自由に動けるような場面を増やしたらいいと思った。

- 発言している人が特定だったので手を挙げてもらって指名するとみんな発言できていいと思った。

(執筆者：井村 友依)

5.取り組みを通して学んだこと、得たこと

【井村 友依】

今回の幼教こども劇場を通じて学んだことは、オンラインの劇や対話で子どもの表現活動を広げることだ。子どもへの問いかけや意見を聞く場面で、子どもが想像したり、自分の意見を言ったり、体で表現したりするようになっていたと思う。

準備の過程で工夫したところは、まず背景を変えたところだ。最初は何も背景がなくずっと同じ色の背景だった。しかしそれだと場所の変化や場面の変化が伝わりにくい事に気づき背景をつけた。また、ただ背景をつけるだけでなくテーマである「廃材を使った遊び」を取り入れペットボトルでロケットや動物、車などを背景に取り入れた。それをしたことで一気に場面が変わったことが分かりやすく、雰囲気明るくなったと感じた。次に牛乳パックで子どもの想像したものを作る場面で、つくるための材料を増やした。丸と四角と三角だけだったけど子どもの想像を広げるためにはもっとたくさんの形があったほうがいいと思うので台形や波や色も増やした。

実践の際の子どもの反応は、最初保育室に入ってきたときは緊張していた様子だった。手遊びを始めたら周りの友達の様子を伺いながら少しずつ慣れていっていった。牛乳屋さんに元気なポーズをみせるシーンでは、子ども達全員が立つよう声をかけ体を使って色々な自分の元気だと思うポーズを表現し、動きのある活動ができた。牛乳パックで製作のシーンでは、牛乳パックで何を想像してつくるか子どもに質問するとみんながそれぞれ思いつくものを発言していた。

【牛島 楓香】

今回の幼教こども劇場で学んだことは子どもたちとの交流を深めることだ。コロナの影響でオンラインでの交流だったけど、最初から最後まで子どもたちも協力的に参加してくれてとても楽しそうにしていたので私達も良かったなと思う。幼教こども劇場での事前準備はとても大変で空き時間や空きコマの授業の時間を使い、一人一人が準備に参加していたのでスムーズに進めることができた。

劇の最初に出てくる象の鼻やネズミくんのチョコッキから出来たブランコはどうしたら象の鼻に見えるのか、ブランコをぶら下げることが出来ないのではどのように再現したらいいのかとても悩んだ。本番の前日までたくさん悩んでいい象の鼻を作ることができたので良かった。また、私はカメラの操作をする担当だったが、カメラの位置やどうやったら子どもたちに見やすい画角で映るのかたくさん工夫した。本番では、しっかりカメラマンとして役割を果たすことができたので良かった。この学んだことを仕事でも繋げられるように頑張りたいと思う。

【江崎 千尋】

今回の幼教こども劇場を通じて学んだことは、子どもたちの興味関心の引き寄せ方である。準備の過程では、子どもたちはどんなことに興味を持ち、どんな風に関わると子どもたちが楽しんでくれるのか、物語を理解しやすいようにどうすべきなのかを意識して進めていった。子どもたちが観ていて退屈にならないように子どもと話す場面を多く取り入れたり、背景に色々な動物やものに見立てたペットボトルを飾り子どもたちの興味を引きつけたりという工夫をした。他にも、子どもたちに物語を理解してもらいやすいように象の鼻やブランコ、牛乳屋さんなどの製作物をメンバーと協力して作り上げた。

私はねずみ君役をして実際の子どもの反応にアドリブで対応することが多く、少し戸惑った部分もありますが、保育の現場では常にアドリブのようなものなので、いい経験ができ良かったと思う。

初めは子どもたちも緊張からか静かだったが、子どもと劇を通して会話を重ねる度に子どもたちが沢山意見を伝えてくれたり、元気な姿が見られ嬉しかった。それと同時にコミュニケーションの大切さを改めて感じる事が出来た。この経験を活かして保育の現場でも頑張っていこうと思う。

【古賀 まい】

今回の幼教こども劇場を通じての最大の学びは、その場に応じての対応の大切さだと思う。事前準備していたものや、子どもの動きの予想をしていても、本番では準備していたとおりに行かなかったり、予想とは違う動きをしたりしていた。その時に慌てずに子どもにとって何が一番いい言動なのか考え、対応しないといけない。それは幼教こども劇場だけではなく、実際の保育の現場でも大切なことだと思う。

準備の過程では、劇の世界に集中できるように小道具や背景を丁寧に作り、衣装も役にあった物を着た。1番最初に出てくる象の鼻やネズミくんのチョコッキから出来たブランコはみんなでどうやったら象の鼻に見えるのか、ブランコをぶら下げることが出来ないのではどのように再現したらいいのかとても悩んだ。みんなで悩みながら最終的には絵本の最後のページを再現することが出来たので良かった。

実践の際の子どもの反応で最初は、すこし戸惑っていたがねずみくん達が楽しんでいる様子を劇で見せていくと少しずつ子ども達も笑顔が出てきて、一緒に牛乳パックを使った製作をすることが出来たのでよかったと思う。

【近藤 優那】

今回の幼教こども劇場を通じて学んだことはオンラインで子どもたちにどうやったら分かりやすく伝えられるか子どもたちにどう楽しんでもらえるかを考えることだ。オンラインで子どもたちと対話するのは初めてだった。オンラインならではの相手の声が届かない聴こえないという出来事が起こった。そのようなことが起きて子どもたちが楽しめるよう全力で取り組むことができたように思う。劇中でも子どもたちが主体になって話を進める部分があり子どもと対話しながら交流を深めることができた。

最初から絵本を決めてどういう内容にするかをみんなで話し合い協力して作り上げていくことは大変だったけど本番を終えて見てみるととてもいいものを作り上げることができたと感じた。子どもたちの反応を見てみると楽しんでいる様子が伝わってきたので嬉しかった。子どもたちの様子に対して素早く反応することが大切と感じた。この経験を活かして仕事に繋がられるよう頑張りたい。

【境 琴音】

本番やリハーサルでは、子どもたちと対話する中で、子どもたちの言葉や意見が相手に通じた時に楽しそうにしたり喜んでる姿を見ることができたように思う。ねずみくんの伸びて使えなくなったチョッキをブランコとして再利用するという所を廃材遊びに繋げて、身近にある使えなくなったものを利用して楽しく遊ぶことが出来るというのを子どもたちに伝えることができたように思う。

準備の過程ではグループ内で話し合いをしながら進める中でより良いシナリオやセットが出来上がったと思う。絵本の最後のページからねずみくんがブランコに乗っている場面に繋がるところは絵本が現実につながっているように感じてとても楽しいと思った。ねずみくんが乗っていたぶらんこは何度か改良を重ねて作ったが、ちゃんとぶらんこに乗っているように見えたので良かったと思う。牛乳屋さんの背景にペットボトルで作った動物や車などを背景として設置していたが見る人からすると何のために設置してあるのか分からないように感じたので少し紹介しても良かったように思う。

実際の子どもの反応は最初は戸惑っているように見えたが慣れてくると声を出したり動きながら楽しんでいるように思った。リモートだったので伝わりにくかった部分もあったと思うが子どもたちが自分の思ったことを伝えようとしながら参加できていたので良かったと思う。

【清水 秋】

今回の子ども劇場を通じての最大の学びは、話の流れだ。私は脚本を担当した。どのような話しにするかみんな話し合った。どんなものだったら話の流れで自然に登場させることができるのか、また、廃材遊びがしやすいもの、子どもが沢山意見を伝えてくれそうな廃材はどのようなものかと考えた。脚本を作る中で子どもからしてみれば、いきなり場面が変わったりするととまどってしまう。そのため最初は絵本の読み聞かせから入り、絵本の最後のページにあるねずみくんが象の鼻でブランコをしている場面からそのまま劇へと繋げた。劇の中では牛乳パックを登場させたいと考えた。ホットケーキを作る話にして、そこから牛乳パックを登場させるか、牛乳パックを見つける話にするか等話しを考えた。話し合いの結果、牛乳屋さんを登場させることにした。しかし、ただ登場するだけでは唐突であるため、音楽と呼び込み、ねずみくんへの呼びかけを取り入れ自然になるよう考えた。

子どもとの関わりをリモートだからこそ劇の中で多めに取り入れたいと考えた。牛乳を貰うのもただ貰うのではなく「元気キャンペーン」として、元気な子どもに配っているという

設定にし、子ども達に元気なポーズを呼びかける場面を作った。子ども達は最初戸惑っていた様子だったが数人がポーズをし始めると、みんな色んなポーズをし、私たちでは想像がつかないような元気なポーズが沢山出てきた。

【世戸 絢楓】

今回の幼教子ども劇場を通じての最大の学びはオンラインでの子どものやり取りの仕方を学んだ。オンラインで子どもたちと対話をするのは難しく伝わらないこともあるのでジャスターなどを取り入れるといいことを学んだ。また子どもとの対話は何が起こるか分からないのでその場の対応をきちんと素早くすることが大切だと思った。

準備の過程では象の鼻作り、ブランコ作りが難しかった。どのようにしたら象の鼻に見えるのか、どの道具をブランコに見立てるかを皆で沢山話し合った。衣装では耳を付けて実際の動物と同じ色の洋服を着たりして工夫した。また背景を途中から追加したりして微調整をして完成度を高めた。

実際の子どもの反応は最初は少し戸惑っていたけど進めていくうちに笑ってくれたり声を出したりしてくれた。牛乳パックで制作をする際何が作れるか聞いた時予想していなかった「家」が出てきたので驚いたが、動物役の人達がすぐに対応していたので凄いな思った。また牛乳パックで何が作れるか背景に置いてあるだけだったので紹介してみても良いのかと思った。

【田中 葵】

今回の幼教子ども劇場を通して、子どもたちが楽しく自由に言葉や身体を使って表現できる環境の作り方や、そのための準備の大切さを学びました。

子どもたちが「ねずみくんのチョッキ」の絵本の世界に入り込めるようにするにはどのような方法があるか考えたり、子どもたちへの声かけの仕方や言葉選び、身体表現など、より伝わりやすくするためにたくさん工夫しました。リモートでやり取りをする難しさも感じましたが、最初大人しかった子どもたちも会話を重ねていくうちに、質問した事に対してたくさん意見を出してくれたり、楽しそうに体を動かして伝えてくれていたので、嬉しかったです。

子どもとやり取りをしていく中で、どのようなことが起こるか予測し、それに合わせた準備にも力を入れました。牛乳パックで制作をするシーンでは、どんな意見が出てても良いように画用紙の色や形をたくさん用意したり、やり取りをシミュレーションしてみたりなど準備しました。音響や、カメラ、音楽、切り替えなど役割もみんなで何度も確認して行いました。子どもたちが楽しむ姿が見られてよかったです。

【水落 未悠】

今回の幼教子ども劇場を通して私の最大の学びは物語を作るときの話の流れに工夫することだ。私は脚本係をした。子ども達はどんな話の内容にすると楽しんでくれるのか、題材のねずみくんのチョッキからどうやって繋げていくのかなど考えることは沢山あったが、特に子どもが物語の世界に入り込めるようにする為の話の流れを考えるのが難しかった。実際にやってみて周りからは絵本との繋がりがあって良かったという感想が見られたのですごく良かったと思う。

準備の過程では、グループの皆と話し合いながら小道具を作ったり、実際に通して練習を何回もする中で裏方の音声の切り替えのタイミングや画面切り替えのタイミングを合わせていくことができたおかげで当日もスムーズに行えたと思った。小道具は特に配置や大きさなど工夫する場面が多く皆で行ったからこそいい物が出来たなと思った。

当日実際に行ってみて、私たちのグループはアドリブでのコミュニケーションが多かったためねずみ役、うさぎ役、ねこ役の3人は特に大変だったと思う。プレと本番では園が変わっていて子ども達の雰囲気、様子も全く違った。初めの方は特に私たちに対する反応に困って

いたように見えた。しかし最後の牛乳パックの工作をする時には沢山の意見を出してくれていて楽しんでいたように思えたので良かったと思う。